



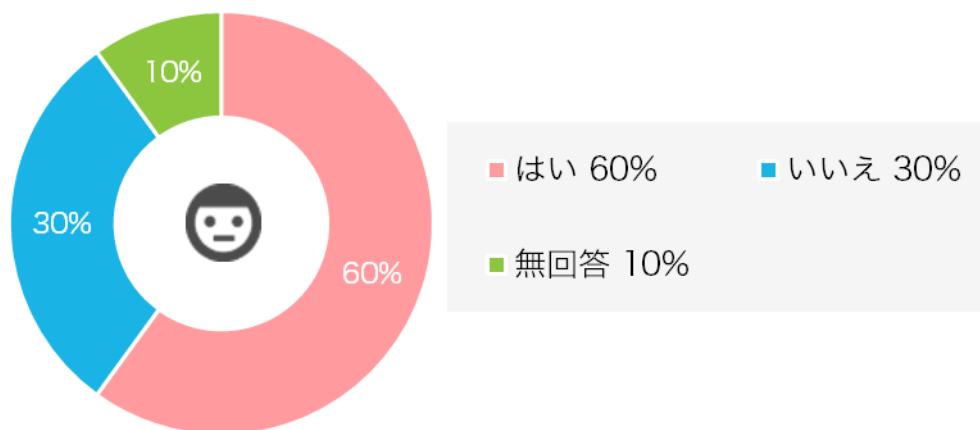
2015 年度調査結果

1994年から開始した「学生平和意識調査」。広島市で開催された「94年アジア競技大会」を前に、アジア留学生へ平和調査をおこなったことがきっかけでした。以来、日本人学生へ、中国地方全体へと広げ、被爆70年を迎えた2015年で第20回目を数えました。

調査日：2015年6月1日～7月13日／対象者：中国地方の大学に通う学生／方法：対面式／配布枚数1,500枚、回収枚数1,019枚（回収率78%）／性別：男性594名（58%）、女性402名（39%）、無回答23名（2%）、計1,019名／出身地：広島408名（40%）、岡山138名（14%）、山口94名（9%）、鳥取17名（2%）、島根55名（5%）、その他264名（26%）、無回答43名（4%）

Q1

あなたは今までに、戦争についての話を家族（祖父母・親戚）から聞いたことがありますか？



6割の学生が「はい」と答える一方、「いいえ」と「無回答」の合計は過去最高の4割で、家族間での戦争体験継承の低下が読み取れました。

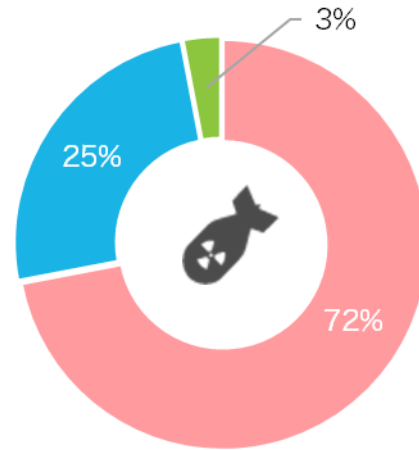
Q2

第2次世界大戦中に、原子爆弾（原爆）が広島・長崎に投下されました。広島・長崎に原爆が投下された日はいつですか？

広島 1945年 8月6日が正答

■ 正答 72% ■ 誤答 25%

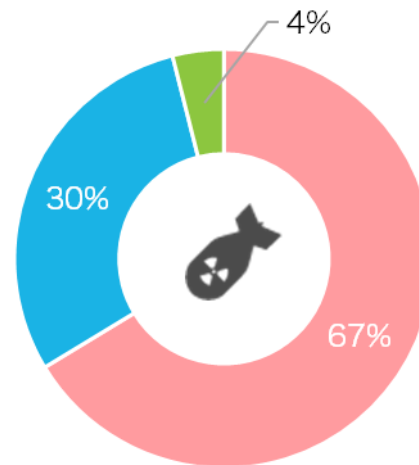
■ 無回答 3%



長崎 1945年 8月9日が正答

■ 正答 67% ■ 誤答 30%

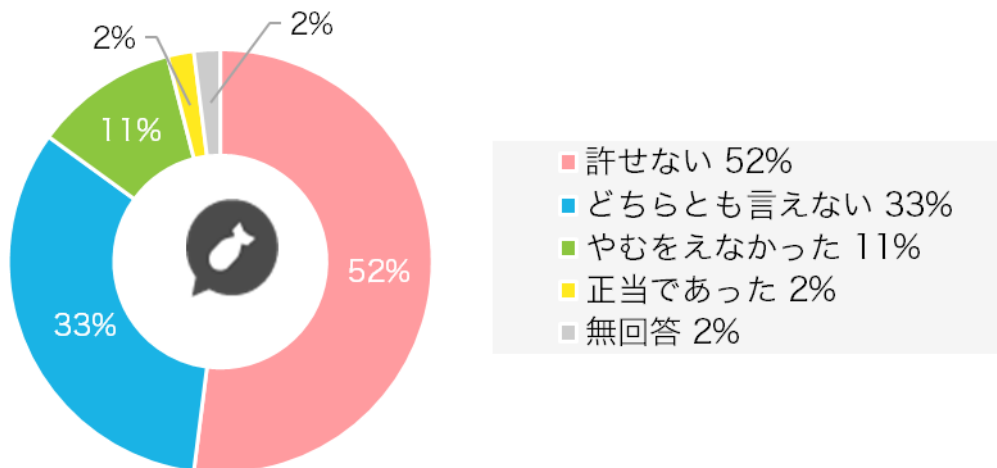
■ 無回答 4%



被爆70年の本年は、マスメディアによる報道の露出が高かっただけに、広島・長崎ともに、正答率が例年以上に高くなりました。

Q3

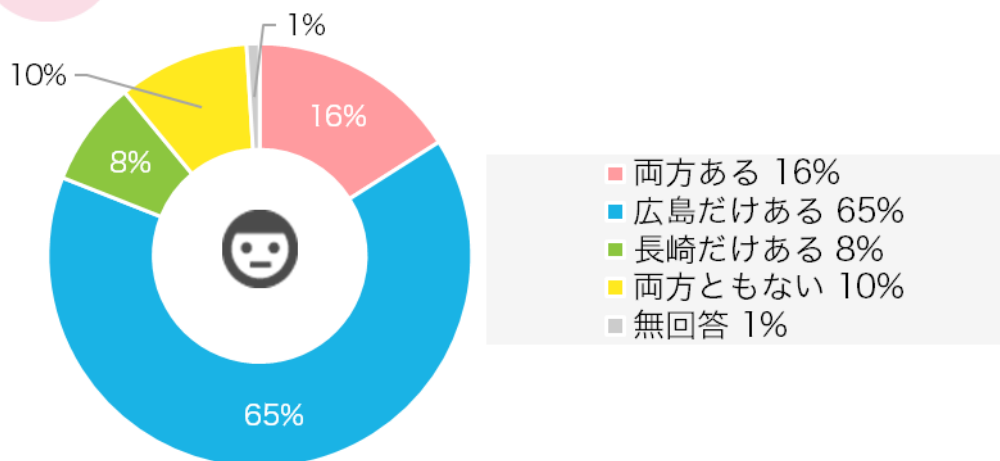
あなたは、広島・長崎への原爆投下に対して
どのように考えていますか？



「許せない」と答えた学生が52%（過去5年間では最高値）。報道等により、原爆の非人道性に触れる機会が多かった本年は、学生たちの意識の変化も、もたらしたと思われます。

Q4

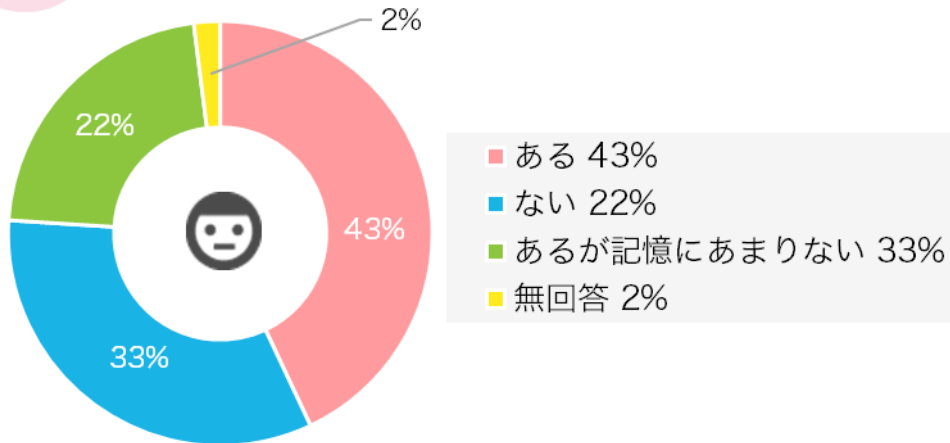
あなたは広島や長崎の原爆資料館や死没者祈念館に訪れた
ことがありますか？



毎年の調査で、一定の学生は訪問している（していた）ことがわかります。広島の前爆資料館は、東館が2016年秋に、本館が2018年夏に、それぞれリニューアル予定なので、改めて訪れてほしいと思います。

Q5

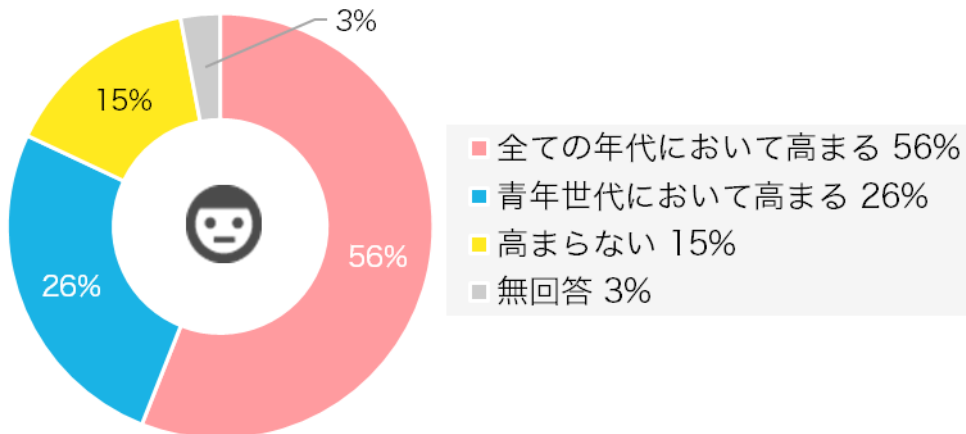
あなたは被爆者から直接、被爆体験を聞いたことがありますか？



「ある」と「あるが記憶にあまりない」が計 76%で、実は過去5年の調査で最高でした。しかし実際には忘れて
いる学生も多く、被爆者の訴えをどのように継承していくかは、今後の課題です。

Q6

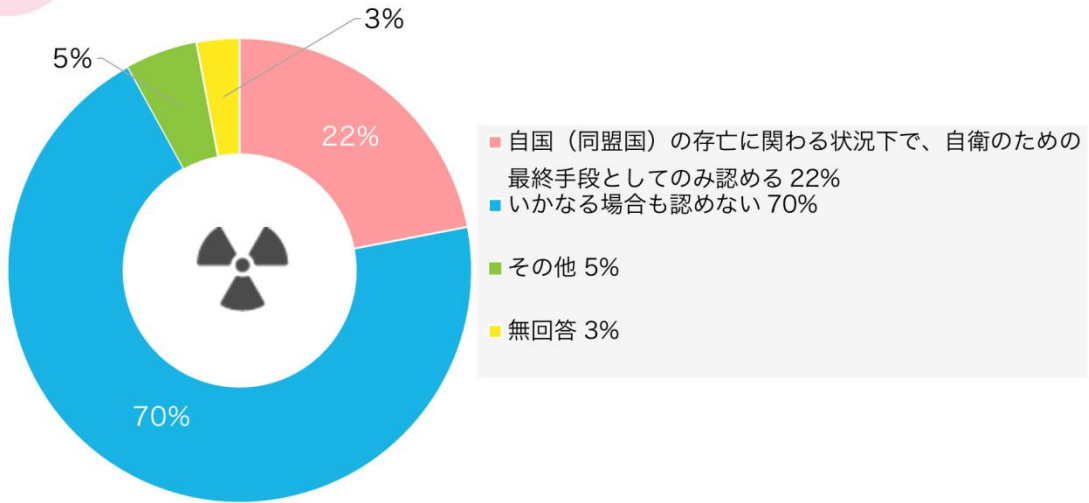
現在、被爆体験を聞く会や被爆体験集の発刊など、様々な
取り組みが行われていますが、そういった取り組みを通
し、平和への機運は高まると思いますか？



被爆の実態を学ぶ聞き取りや体験集の発刊は、青年や全ての世代の気運を高めると学生は認識している(82%)一
方、「高まらない(15%)」と認識している学生もいるようです。

Q7

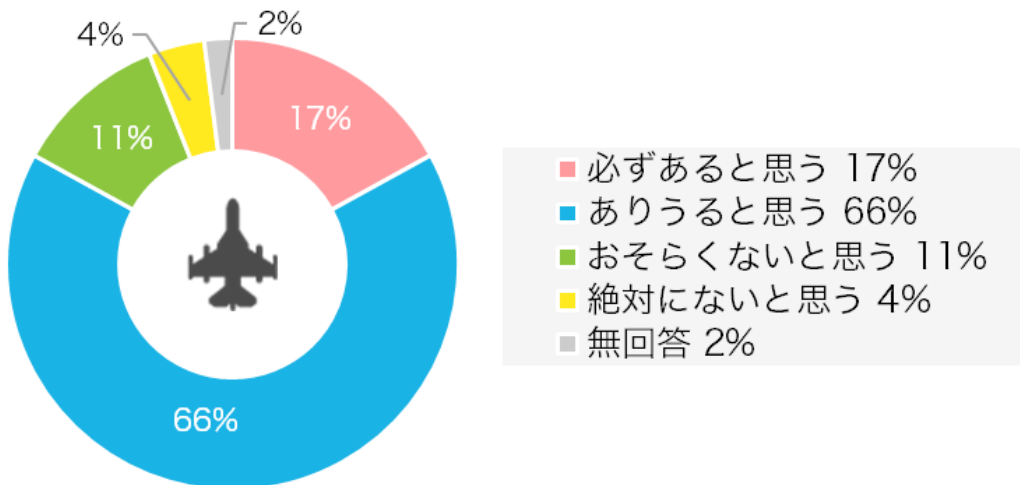
あなたは、核兵器の存在についてどのように考えますか？



「いかなる場合も認めない」を選んだ学生は、過去5年で一番高い回答率でした。

Q8

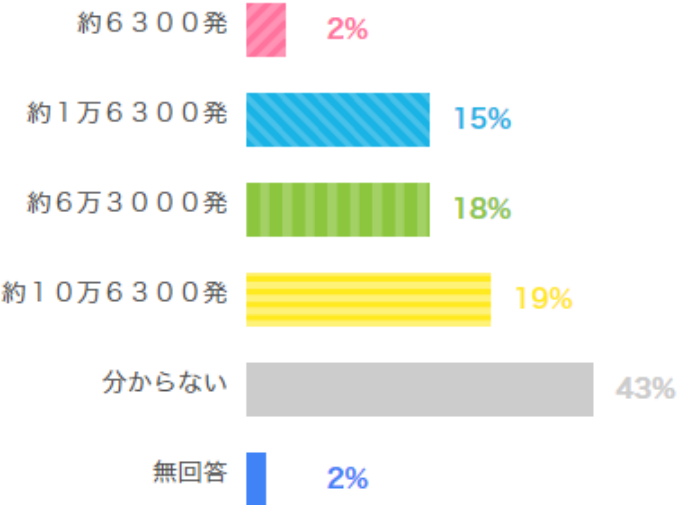
今後・戦争・紛争で核兵器の使用がありうと思いますか？



北朝鮮の核実験や国際テロリストの活動拡大の影響のためか、核兵器の実戦使用に懸念をもっている学生が多いようです。

Q9

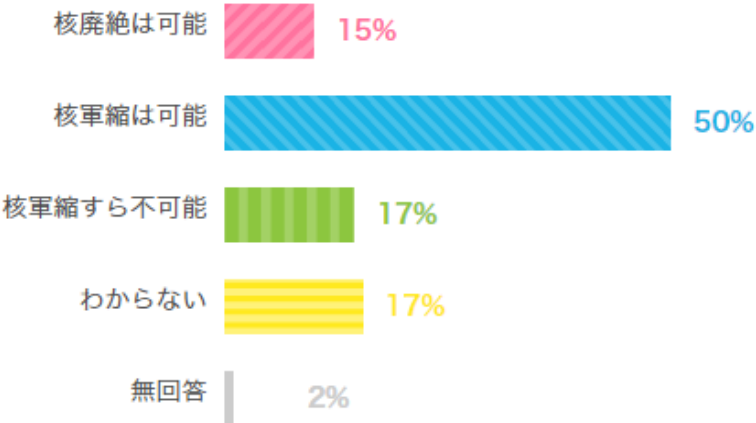
核兵器は現在、地球上におよそいくつ存在すると思いますか？



正解は、「約1万6300発」。しかし、核兵器という「悪魔の兵器」は、1発でもこの世にあってはなりません。

Q10

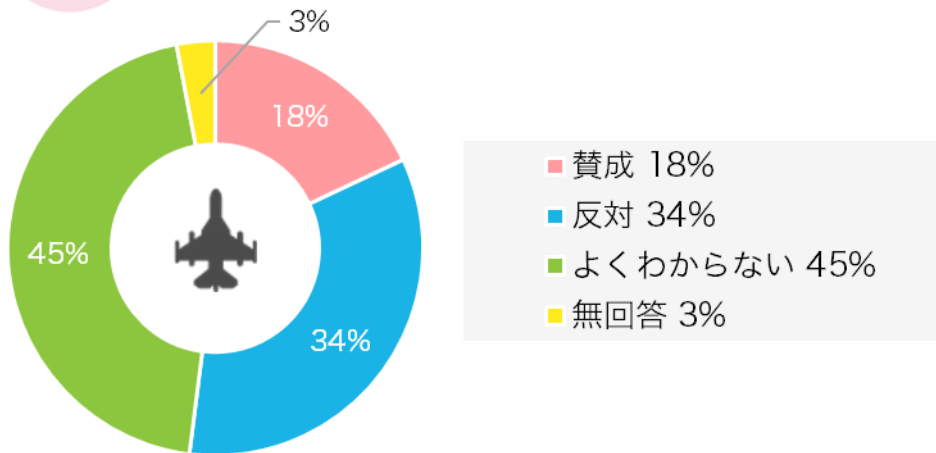
核兵器は廃絶可能と思いますか？



現実論として様々な意見に分かれました。「廃絶は不可能だが核軍縮は可能」と考える学生が2人に1人いるという事実も浮かび上がってきました。

Q11

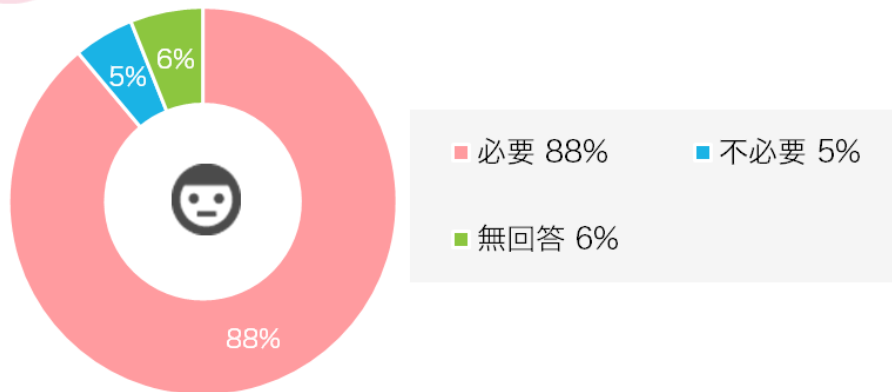
昨年の閣議決定などで話題になっている集団的自衛権の行使に関して、あなたは賛成ですか。反対ですか。



賛否あるなか、「よくわからない」が45%いました。与野党やマスコミからの正確な情報発信を期待しますが、学生間ではあまり重要視されていない話題なのかもしれません。

Q12

戦争・被爆体験継承の必要性について、あなたはどのように考えますか。



88%もの学生が「必要」と感じています。「戦争・被爆体験の継承」が無くなった時に、人類は愚かな戦争時代に逆行してしまうことを、学生たちはしっかり受け止めていると思われます。